

連載

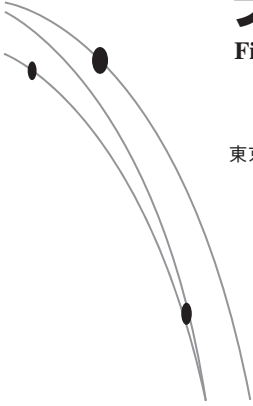
フィールド・アイ

Field Eye

西アフリカから——②

東京大学准教授 澤田 康幸

Yasuyuki Sawada



ラタンのこと

途上国で農村調査をしていると、いつの間にかたくさんの子供たちに囲まれてしまいます。まるで宇宙人を見るかのようなつぶらな瞳に凝視されてしまうと、関西人の小生としては、空手の真似をしたりすることもしばしばです。子供の前で「ぜひ一曲」と言われて、「上を向いて歩こう」の一番を何回も歌ったこともあります。そういえば、インドの片田舎で「おお、ジャッキー・チェンだ！子供と一緒に写真を撮ってほしいといってるから」といわれて一緒に写真を撮ってあげたこともあります。ついでに思い出しましたがベトナムではある役人に「金総書記にそっくりだ」と言われてむっとしたこともありました。

話がそれましたが、前回に続き、西アフリカのある国でフィールドワークの真ただ中で書いています。さて、今回も再びインドを代表するとされるサタジット・レイの映画の話から始めます。*Teen Kanya* (*Three Daughters*) と題する三つの短編集の一つである *The Postmaster* の話です。*Three Daughters* といいつつ、二部作なのですが、*The Postmaster* は、アジア初のノーベル文学賞受賞者であるラビンドラナート・タゴール原作の名作です。話は、ベンガル地方の片田舎に、新しい郵便局長ナンダラル氏がやってきたところから始まります。ナンダラル氏はカルカッタから思いがけず派遣され、郵便局に住み込みすることになるのです。都会育ちのナンダラル氏には村の生活は、勝手がわからないことばかり。おそらく村の手当てがなんだろうが、孤児の女の子ラタンが、郵便局の裏側に住み込んでご飯を作ったり、掃除をしたり、洗濯をしてくれたりという面倒を見てくれます。ラタンはおそらく

8歳ぐらいだと思いますが、前の郵便局長がしばしば暴力をふるったらしく、初対面のナンダラル氏にも伏し目がちで怯えているようでした。「洋服はいつも清潔にしておきなさい」「読み書きを教えてあげよう」「お小遣いをあげるから、ノートと鉛筆を買っておいで」と親切なナンダラル氏にラタンは次第に心を開いてゆくのでした。

世界にはラタンのような子、あるいはアカデミー賞作品「スラムドッグミリオネア」に出てくるような子供たちがどのくらいいるのでしょうか？学校にも行かず、読み書きもできず、毎日働く子供たち。15歳未満の学齢期の子供が何らかの形で労働に従事していることを「児童労働 (Child labor)」と呼んでいます。児童労働が蔓延し、就学率が低いことは、インドが抱える深刻な問題ですが、インドにはそのような児童労働に従事する子供が1億人もいるという推計もあります。たしかに、インドに行くと子供が路上の物売りやレストランの給仕として働いているのにしばしば遭遇します。そういえば、15年前、ニューデリーのコンノートプレースで靴磨きの子供たちに付きまといわれたのを思い出しました。泥を見事に私の靴に命中させて靴磨きにありつこうとしている姿はたくましくもありましたが……。

さて、なぜ1億人もの子供たちが働かなければいけないのでしょうか？インドの児童労働に関する実証研究のほとんどは、国際機関やインド政府が集めた既存の多目的のマイクロデータを用いたものです。したがって、なぜ子供が働かなければいけないのか、という重要な問いかけに満足に答えることができません。こうした現状の解決に少しでも貢献すべく、アジア経済研究所 (アジ研) のプロジェクトで、黒崎卓・不破信彦・伊藤成朗・久保研介といった気鋭の研究者たちとインドでフィールド調査を開始したのは6年前のことです。

我々の研究ではインド南部アーンドラ・プラデーシュ州の辺境農村部で隣接州との州境近隣地域を対象に、児童労働の実態と復学プログラムの効果を調べました。この地域は南インドにおいて最も貧しく、児童労働が多いことが知られています。辺境であるだけでなく、州境に近いことで、いずれの州都からも遠く、公的サービスが行き届いていないという地域です。さらに、2つの公用語が使われており、家庭内でも両親の母語が異なることも珍しくなく、一般に子どもの学

習に影響が強いとされる母親が、公立学校で使われている州の公用語を話さないことも、児童が就学しにくい原因となっているとみられます。また、この地域では、一代限りのハイブリッド綿花種子を作るための交配の手作業に児童労働が使われています（黒崎、2004）。

われわれはアーンドラ・プラデーシュ州で児童労働撲滅運動を実施している NGO の MV 財団とともに家計調査を行い、児童労働の実態と原因を調べました。種子会社は、かなりの額の賃金を親に前渡しして、貧困にあえぐ親がその娘を労働に送り出すよう誘惑したり、子供を集めて映画のビデオを見せたりして子供を勧誘するそうです。我々の現地調査中にも、あどけない姿で多数の子供たちがせせと交配の手作業をする姿にしばしば出くわしました。一見「働き者の子供たち」という風景のように見えますが、その背後に国際的種子会社の巨大ビジネスや、債務労働化してしまっているのかもしれない子供たちの置かれた状況を考えるに背筋が寒くなる気がしました。

我々の調査は、親を対象として、世帯メンバーの個人レベルの時間配分データ、様々な社会経済情報を丹念に収集するというものです。調査票の改訂作業を繰り返し、調査員をトレーニングし、調査活動のプリテストをやり、本格的な調査を実施してデータを構築した上で分析・論文を執筆してゆくという手続きは、最初は気の遠くなるような作業に感じられるものです。我々は、2年かけて調査を実施し、何とか論文を仕上げ、*Developing Economies* というアジ研が出版している国際学術雑誌に特集号を組むことができました。これまで得られた発見としては、母親の学歴が父親の学

歴よりも子供の就学に強い影響を持つことや、家計が貧しいほど母親は家計外で就労しやすく、母親の家計外就労は年長の女兒の就学を妨げること、などがわかっています（Sawada *et al.* 2006）。

この研究プロジェクトのため、2004年の夏に村々を回って調査のプリテストをやっていました。泊まった宿に温水が出ないのは想定内として、思いがけず我々のメンバーが後で高熱に倒れてしまいました。聞くとところによると蚊を媒介とする感染症である、デング熱が疑われたということです。蚊を媒介にした病気といえば、マラリアも深刻な人的被害を引き起こしています。特に私が今滞在しているサブサハラアフリカ地域では多くの妊産婦と5歳未満の乳幼児がマラリアで亡くなっています。冒頭の孤児ラタンがナンダラル氏の体を慮ってマラリアの予防薬を飲んで見せるシーンが出てきます。しかし、ナンダラル氏は口に苦いマラリア薬をいつまでも飲まず、最後は本当にマラリアにかかってしまいました。今回は、このマラリアの話をしたと思います。

参考文献

- 黒崎卓 (2004) 「連載 南方見聞録⑧：ハイブリッド棉花生産で働く子供たち」『経済セミナー』2004年11月号, pp.58-59.
Sawada, Y., K. Kubo, N. Fuwa, S. Ito, and T. Kurosaki (2006) "On the Mother and Child Labor Nexus under Credit Constraints: Findings from Rural India." *Developing Economies* 44(4), pp.465-499.

さわだ・やすゆき 東京大学大学院経済学研究科准教授。
最近の主な著作に『市場と経済発展——途上国における貧困削減に向けて』（共編、東洋経済新報社、2006年）。開発経済学・応用ミクロ計量経済学専攻。